

『小学校学習指導要領解説 図画工作編』における児童観に関する研究

— 平成20年版及び平成29年版の分析と比較を通して —

新井 馨¹, 池田 吏志², 会田 憧夢³, 黒坂 大樹⁴, 加藤 宇章⁵, 縄田真依子⁶, 佛崎はる菜⁷

要約

図画工作科教育ではこれまで、児童の発達をテーマとした児童観に関する研究が多く行われてきた。しかし、先行研究では学習指導要領解説に記述された児童観に焦点を当てた研究はほとんど行われてこなかった。そこで、本研究では平成20年版、平成29年版『小学校学習指導要領解説 図画工作編』における児童観の観点及び両文書の比較による記述内容の変化を明らかにすることを目的とした。KJ法を用いた分類・整理の結果、児童観は【友人関係】、【言語活動】、【材料用具との関わり】、【経験・体験との関わり】、【技能】、【興味関心・意欲】、【対象への関わり】、【思考過程】の8種類の観点で述べられていた。また、児童観に関する記述内容の変化として、「形」、「色」、「イメージ」の文言が含まれた文章の増加、日常生活と図画工作科の関わりに関する文章の増加、複数の資質・能力を関係づける文章の増加の3点が特徴として挙げられた。

キーワード：児童観、子ども観、図画工作、小学校学習指導要領解説 図画工作編、比較

1. 研究の背景と目的

児童観とは、現代教育学事典によると「おとなの子どもに対する見方・まなざしのこと」¹⁾とあり、児童学事典では、「子どもとは何者か」その対象や属性、「子ども期」について歴史社会的に構築されてきた認識や表象のことを意味し、子どもという存在に対して人々の間で共有されてきた観念、価値観や感受性のあり方を問うもの」²⁾とされる。さらに、ブリタニカ国際大百科事典では「子供はどのようなものであるかについてのおとなの見方。児童観は、各人の価値観の相違や子供に対する期待の大小により異なるから、時代や社会環境によって児童観も異なってくる」³⁾と記されている。学校教育において児童観は、学習指導案を作成する際の基盤として教材観や指導観と共に位置づけられている。

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期 院生

² 広島大学

³ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期 院生

⁴ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期 院生

⁵ 造形教育研究所「あたりえ ばお」代表

⁶ 山口県美祢市立伊佐小学校 教諭

⁷ 広島県江田島市立大古小学校 教諭

図画工作科教育でも子ども観や児童観（以下、児童観に統一）をテーマにした研究がこれまで多く行われてきた。児童観を主題とした代表的な研究者であるローウェンフェルドは、児童の発達に焦点をあて、年齢に応じた認識の変化や描画の特徴を整理している。ローウェンフェルドは、小学生の年齢に該当する段階を「前図式期」、「図式期」、「初期写実期」として位置づけ、それぞれの特徴として表現活動と精神の発達を関連づけている⁴⁾。同じく児童観をテーマとした研究には、東山明の子どもの絵の発達段階に着目した一連の研究⁵⁾や阿部宏行による空間表現の発達に着目した研究⁶⁾もある。このように、図画工作科における児童観に関する研究は主に「発達」をテーマとして行われており、このことは児童に何ができて何ができないのか、また、どのような特性があるのかといったことを把握することが指導の基盤になるという問題意識が関係しているものと考えられる。

他方、児童観は『小学校学習指導要領解説 図画工作編』においても重要な役割を果たしている。本書では、文章の構成として、まず『小学校学習指導要領』の本文からの引用が示され、その後児童観が記述され、児童観に基づいて指導上の留意点が記述されている。つまり、教科の目標及び内容を設定する基盤として児童観は重視され、位置づけられている。しかし、先行研究において『小学校学習指導要領解説 図画工作編』に記述された児童観に焦点を当てた研究は管見の限り見当たらなかった。指導の指針を示す基盤となる児童観であるにもかかわらず、そこにどのような内容が述べられているのか、またどのような観点で児童が捉えられているのか、これまで整理して示されてこなかった。

上記の問題を踏まえ、本研究では児童観を「図画工作科における学習活動の基盤となる児童の特性」と定義し、児童観について平成20年告示の『小学校学習指導要領解説 図画工作編』⁷⁾（以後、平成20年版と記す）と『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』⁸⁾（以後、平成29年版と記す）を分析・比較した。本研究の目的は次の3点である。1) 児童観がどのような観点で記述されているかを明らかにする。2) 各観点における低学年、中学年、高学年の発達に応じた内容の相違を明らかにする。3) 平成20年版と29年版における児童観の記述内容の変化を明らかにする。

2. 研究方法

本研究では、次の手順と方法で分析を行った。

- 1) 本文の分割：平成20年版、平成29年版のそれぞれについて、本文全体を、①第1章、②第2章、③第3章の1、2年生、④第3章の3、4年生、⑤第3章の5、6年生、⑥第4章に分割した。
- 2) 児童観の記述箇所抽出：解説の中から児童の実態に関する記述を抽出した。該当箇所は本文において「この時期の児童は」や「低学年（中学年、高学年）の児童は」、「低学年（中学年、高学年）では」が文頭につく文章や、文末に「～の傾向がある」、「～の段階である」、「～できるようになる」と記された文章を抽出した。分担は、平成20年版では上述1)の①、②、⑥を池田が、③を縄田が、④を加藤が、⑤を佛崎が担当した。平成29年版では、上述1)の①、②、⑥を池田が、③を新井が、④を会田が、⑤を黒坂が担当した。一通り抽出した後、各担当箇所を相互に交換し、抜けや未抽出箇所が無いかを確認し、適宜修正した。
- 3) 児童観を構成する観点の分析：上述2)で抽出した児童観に関する記述を、意味内容のまとまりごとに分割した。一文をそのまま取り出す場合もあったが、一文の中に複数の内容が記述されている場合には、分割して取り出した。取り出す文章の範囲についてもメンバー相互で確認した。その後、

取り出した記述を短冊状にし、KJ法を用いて分類した。平成20年版では、池田、加藤、縄田、佛崎が共同で分類した（平成24年5月～7月）。そして、平成29年版では、新井、池田、会田、黒坂が共同で分類した（平成30年5月～6月）。なお、平成20年版の短冊については再確認のため、平成30年にも新井、池田、会田、黒坂により再度分類した。分析では、メンバーで短冊を1本ずつ確認し、児童がどのような観点で捉えられているのか、違いを確認しながら分類を行なった。その後、分類したままとまりごとに観点の命名を行った。

- 4) 低・中・高学年単位の分析：上述3) の各観点に含まれた短冊について、低学年、中学年、高学年に関するそれぞれの記述の違いを分析し、発達段階の違いに応じて観点ごとの児童観の捉えがどのように変化しているのかを検討した。
- 5) 4) に関する平成20年版と平成29年版の記述内容の比較を行った。

3 結果

3.1 児童観の観点

平成20年版及び平成29年版を分析した結果、『小学校学習指導要領解説 図画工作編』で述べられている児童観は、【友人関係】、【言語活動】、【材料用具との関わり】、【経験・体験との関わり】、【技能】、【興味関心・意欲】、【対象への関わり】、【思考過程】の8種類に分類できた。表1は平成20年版の分析結果、表2は平成29年版の分析結果をまとめたものである。なお、具体例には代表的な記述を抜粋して記載している。

3.2 8種類の観定の定義と発達段階による相違

ここでは、抽出した8種類の観定の定義を示すと共に、各観点における低学年、中学年、高学年の相違を検討する。

【友人関係】：同年代の友人との関わり方の特徴を示す観点

低学年では、「周りの人や友人の考えや行動、周囲の環境などと一体になって活動する」や「友人などの話をそのまま自分の気付きのように捉え」などの記述があるように、自他不可分の特性や対象との一体感、そして自己中心性が特徴として挙げられていた。それが中学年になると、「友人と一緒に活動を好み、交流しあうことで学習をより高めていくことができるようになる」や「ルールなどを共有しながら遊ぶようになる」といったように、自我・他者の分離や一定の距離感、また、「ギャングエイジ」特有のルールを伴う交流が可能になることが記されていた。さらに、高学年では、「友人の立場になって」、や「他者の立場にたち」に見られるように、林が述べる「中心化からの脱却」⁹⁾が特徴として記される一方で、「友人や他の人からの発言や反応がときとして学習意欲を左右することもある」といった製作や鑑賞における他者からの影響の大きさを示す記述もあった。

【言語活動】：児童の発言や対話の特徴を示す観点

低学年では、ピアジェが「自己中心語」¹⁰⁾とよぶ「独り言のように口にしたり」や「自然に言葉にしたり」といった、表現や鑑賞の活動中に語られるインフォーマルな状況での率直な発言に関する記述がみられた。それが中学年になると、「イメージについて説明したり」に見られるようにイメージの言語化や説明的対話が可能になることが挙げられていた。さらに、高学年では、「感じたことを話すこ

表1 平成20年版の観点別分類と具体例

観点	学年	具体例 (抜粋)	掲載箇所
友人関係	低学年	そこには、周りの人や友人の考えや行動、周囲の環境などと一体になって活動する低学年の姿がある	1・2年の目標と内容「目標」
		友人の話の聞きながら楽しむ様子がある	1・2年の目標と内容「目標」
		友人の話に耳を傾けたりする姿も頻繁にみられる	1・2年の目標と内容「鑑賞」
	中学年	友人と一緒に活動を好み、交流しあうことで学習をより高めていくことができるようになる	3・4年の目標と内容「目標」
		この時期の児童は友人と共に活動することを楽しみ、目的や面白さ、楽しさ、簡単なルールなどを共有しながら遊ぶようになる	3・4年の目標と内容「造形遊び」
		友人の発想を意図時に取り入れられたり、教えあったりしながら表し方を工夫する場面も見られるようになる	3・4年の目標と内容「絵・立体・工作」
高学年	友人の立場になってその心情を思いはかたりやすくなる	5・6年の目標と内容「目標」	
	友人や他の人からの発言や反応がときとして学習意欲を左右することもある	5・6年の目標と内容「目標」	
言語活動	低学年	反面、自分らしさを表すことのできる題材では、友人と活発に交流したり見せ合ったりする様子が見られる	5・6年の目標と内容「絵・立体・工作」
		そして身近な材料などを見たり触ったりすることから感じ取った面白さや楽しさを自然に言葉にしたり	1・2年の目標と内容「目標」
	中学年	鑑賞して気づいたことや想像したことなどを誰かに話したり、友人と共感しあったりする姿も見られる	3・4年の目標と内容「鑑賞」
		自分のイメージについて説明できるようになる	3・4年の目標と内容「共通事項」
	高学年	自分の行動を理由づけて説明したり、その時の気持ちを合わせて示したりする	3・4年の目標と内容「共通事項」
		ある表現形式に対して苦手意識をもったり、感じたことや考えたことを話すことを躊躇したりすることもある	5・6年の目標と内容「目標」
材料用具との関わり	低学年	対象や出来事から特徴を取り出すことができるようになるとともに、それを言葉に置き換えて説明することができるようになる	5・6年の目標と内容「共通事項」
		この時期の児童は、土や粘土などの材料に体ごと関わって楽しんだり	1・2年の目標と内容「造形遊び」
		身近にあるいろいろな材料を並べたり、積んだり、何かに見立てて遊んだりする	1・2年の目標と内容「造形遊び」
	中学年	材料の感触を楽しんだりするなどである	1・2年の目標と内容「鑑賞」
		用具を使うことに没頭するなど	3・4年の目標と内容「目標」
	高学年	自分の体より大きな材料を使ったり	3・4年の目標と内容「造形遊び」
自分の表現したいことに合わせて材料や用具を使うことができるようになる		3・4年の目標と内容「絵・立体・工作」	
初めは材料を低学年のように並べ、次に中学年のように組み合わせ、そこから複雑な形をつくりだすこともある		5・6年の目標と内容「造形遊び」	
経験・体験との関わり	低学年	材料や場所を形や色だけでなく、自然の減少や動き、空間や奥行など、様々な視点から分析的にとらえ、そこから発想を膨らませたり活動を検討したりすることもある	5・6年の目標と内容「造形遊び」
		社会的に広く流通している図像や情報を学習の材料として利用できるようになる	5・6年の目標と内容「共通事項」
		活動と場、体験と感情などが密接に結びついているため	1・2年目標と内容「目標」
	中学年	感覚や気持ちを生かしながら思いのままにつくることが児童にとって楽しいこと	1・2年目標と内容「A 表現」
		低学年の児童は、一人一人の生活体験が直接、学習活動に反映する	1・2年目標と内容「共通事項」
		これまでの経験を生かし、人やものなどの様々な条件を組み合わせた、それらを調整したりしながら活動する姿がある	3・4年目標と内容「A 表現」
高学年	自分の作品や発言を第三者的に振り返ったり、集団や社会などとの関係でとらえたりするようになる	5・6年目標と内容「目標」	
	自分の経験を基に形や色などの特徴から分析的にみたり	5・6年目標と内容「目標」	
	自分の感情を形や色に表すことを通して、自分を見つめる活動などもできるようになる	5・6年目標と内容「A 表現」	
技能	低学年	結果にこだわらずに様々な方法を試したり	1・2年目標と内容「目標」
		一人一人の児童の特性が目だつようになり、多様な試みが見られるようになる	3・4年目標と内容「目標」
		手などの働きも巧みさを増し、扱える材料や用具の範囲が広がってくる	3・4年目標と内容「目標」
	中学年	自分のイメージについて説明できるようになる	3・4年目標と内容「共通事項」
		手などの力強さや巧みさが増すとともに、他教科等で学習した内容や考え方を活用することができるようになる	5・6年目標と内容「A 表現」
		自分なりの見通しを持つことで表現の質を高めることができるようになる	5・6年目標と内容「A 表現」
高学年	造形的な特徴を関連付けたりまとめたりできるようになる	5・6年目標と内容「共通事項」	
	この時期の児童は、かいたりつくったりする活動そのものを楽しむ傾向がある	1・2年目標と内容「A 表現」	
	気に入った活動を意欲的に追究したりするようになる	3・4年目標と内容「目標」	
興味・関心・意欲	低学年	活動そのものに夢中になるような特徴がある	3・4年目標と内容「目標」
		自分なりに納得いく表現や鑑賞の活動ができたり作品を完成させたときなどに充実感を感じる傾向が強くなる	5・6年目標と内容「目標」
		自分を取り巻く環境や生活などについての認識が高まり、社会的な出来事や情報、流行などに関心を示すようになる	5・6年目標と内容「A 表現」
	中学年	この時期の児童は、周りの人、モノ、環境などに体ごとかわり全身で感じるなど、対象と一体になって活動する傾向がある	1・2年の目標と内容「目標」
		低学年の児童は、鑑賞活動において、自分と作品が一体となるような気持ちで見たり感じたりする	1・2年の目標と内容「目標」
		この時期の児童は、その子なりの感覚や気持ちを基に、大きい小さい、長い短いなど、大まかなまとまりによって身の回りの世界を捉えている	1・2年の目標と内容「共通事項」
高学年	ある程度対象との間に距離をおいて考え、そこで気づいたことを活用して活動することができるようになる	3・4年の目標と内容「目標」	
	低学年と同じように、作品と自分が一体となるような気持ちで見たり感じたりする傾向は変わらない	3・4年の目標と内容「目標」	
	対象と自分の印象とを分けてとらえられるようになる	3・4年の目標と内容「鑑賞」	
対象への関わり	低学年	物事を他者や社会的な視点からとらえられるようになる	5・6年の目標と内容「鑑賞」
		つくりながら考えたり	1・2年目標と内容「目標」
		結果にこだわらずに様々な方法を試したり	1・2年目標と内容「目標」
	中学年	既存の概念にとらわれずに発想するなどの特徴がみられる	1・2年目標と内容「目標」
		その意味を自分なりにとらえ、学習している	1・2年目標と内容「目標」
		低学年の児童は、この感覚や気持ちが自分の造形活動と直接つながっており一体的で分け難い	1・2年目標と内容「A 表現」
高学年	この時期の児童は、その子なりの感覚や気持ちを基に、大きい小さい、長い短いなど、大まかなまとまりによって身の回りの世界を捉えている	1・2年目標と内容「共通事項」	
	低学年と同じように、作品と自分が一体となるような気持ちで見たり感じたりする傾向は変わらない	3・4年の目標と内容「目標」	
	対象や出来事に対して自分の気持ちや考えを具体的に持つようになる	3・4年の目標と内容「共通事項」	
思考過程	低学年	対象と自分の印象とを分けてとらえられるようになる	3・4年の目標と内容「共通事項」
		夢や不思議な世界についての想像を楽しんだり	3・4年の目標と内容「目標」
		形や色などについては、単に区別するだけでなく、三角形は鋭い感じがする、赤い色は元気な感じがするなど、対象の感じまでとらえることができるようになる	3・4年の目標と内容「共通事項」
	中学年	この段階においても、作品と自分が一体となるような気持ちで見たり感じたりする傾向は残っている	5・6年の目標と内容「目標」
		興味や関心の対象を広げる中で自分らしい感じ方や見方をすること	5・6年の目標と内容「B 鑑賞」
		造形的な特徴を関連付けたりまとめたりできるようになる	5・6年の目標と内容「共通事項」
高学年	結果を予想したり、条件を基に可能性を検討したりするなど、論理的な進め方が可能になる	5・6年の目標と内容「共通事項」	
	社会的な情報を活用して考えたり、直接体験していないことに思いを巡らせたりすることができる	5・6年の目標と内容「目標」	

表2 平成29年版の観点別分類と具体例

観点	学年	具体例 (抜粋)	掲載箇所
友人関係	低学年	周りの人、物、環境などに体ごとに関わり全身で感じるなど、対象と一体となって	1・2年の目標と内容「鑑賞」
		友人などの話をそのまま自分の気持ちのようにつまみ	1・2年の目標と内容「鑑賞」
	中学年	中学年は、友人との活動を好む発達段階である	3・4年の目標と内容「目標」
		感じ取ったことや想像したことなどを誰かに話したり、友人と共感しあったりする姿も見られる	3・4年の目標と内容「鑑賞」
	高学年	友人の作品から自分の考えと異なることを見付けて、その思いをくみ取ったり	3・4年の目標と内容「鑑賞」
		友人の立場に立ってその心情に思いを巡らせたりするようになる	5・6年の目標と内容「目標」
言語活動	低学年	自分の体験したことを伝えることで他者と体験を共有したり、自分の認識を広げたりすることができるようになる	5・6年の目標と内容「鑑賞」
	低学年	自分が見つけたことを独り言のように口にした	1・2年の目標と内容「鑑賞」
	中学年	自分の行為や表情などについて理由を付けて説明したり	3・4年の目標と内容「共通事項」
	高学年	自分のイメージについて説明したりする姿も見られる	3・4年の目標と内容「共通事項」
材料用具との関わり	低学年	ある表現形式に対して苦手意識をもったり、感じたことや考えたことを話したりすることを躊躇したりすることや対象や事象、出来事から特徴を取り出し、それを言葉に置き換えて説明する姿が見られるようになる	5・6年の目標と内容「A表現(1)」 5・6年の目標と内容「A表現(2)」
		材料の感触を楽しんだりするなどの姿もある	1・2年の目標と内容「鑑賞」
	中学年	材料に体ごとにかかわって楽しんだり、身近にあるいろいろな材料を並べたり、つなげたり、つまみたりして、進んで材料などに働きかけている姿がみられる	1・2年の目標と内容「A表現(2)」
	中学年	自分の表したいことに合わせて材料や用具を使う姿も見られる	3・4年の目標と内容「A表現(2)」
	高学年	手などの働きも巧みさを増し、扱える材料や用具の範囲が広がり、多様な試みが見られるようになる	3・4年の目標と内容「目標」
		材料の用具の扱い方も巧みになり	5・6年の目標と内容「A表現(2)」
経験・体験との関わり	低学年	表したいことに適した材料や用具を選んだり、表現方法を組み合わせて表したりする	5・6年の目標と内容「A表現(2)」
		表現したり鑑賞したりすることが一体になりながら楽しく活動するという低学年特有のよさ	1・2年の目標と内容「目標」
	中学年	結果にこだわらず様々な方法を試したり、発想が徐々に展開したりするなどの様子も見られる	1・2年の目標と内容「目標」
	高学年	対象や事象、身近な出来事に対して自分の考えやイメージを具体的にもつようになる姿が見られる	3・4年の目標と内容「共通事項」
		ある程度対象との間に距離をおいて考え、そこで気付いたことを活用して活動することができる傾向がある	3・4年の目標と内容「目標」
	高学年	生活範囲の広がりや発達に応じて、鑑賞の対象が広がり	3・4年の目標と内容「鑑賞」
技能	低学年	直接体験していないことに思いを巡らせたりすることができるようになる傾向がある	5・6年の目標と内容「目標」
		他教科等で学習した内容や方法などを活用することができるようになる	5・6年の目標と内容「A表現(2)」
	中学年	社会的な事物や事象、先人の実践なども学習の材料として活用できるようになる	5・6年の目標と内容「A表現(2)」
	高学年	特に発想や構想をすることと技能を働かせることが密接につながっていることを踏まえ	1・2年の目標と内容「A表現(2)」
		手などの働きも巧みさを増し、扱える材料や用具の種類が増え、自分の表したいことに合わせて材料や用具を使う姿も見られる	3・4年の目標と内容「A表現(2)」
	高学年	発想や構想をしたり技能を働かせたりしているときに、友人の作品や身近な材料などから、自分の見方や感じ方を広げたり	3・4年の目標と内容「目標」
興味関心・意欲	低学年	独立して設定した鑑賞の場面で、新たな発想や構想、技能の手掛かりをえることもある	3・4年の目標と内容「鑑賞」
		自分なりの見通しをもつことで表現の質を高めることができるようになる	5・6年の目標と内容「A表現(2)」
	中学年	造形的な特徴を捉え、抽象的なイメージをもつこともできるようになる	5・6年の目標と内容「共通事項」
	高学年	形や色などから分析的に見たり、意図や気持ちなどを読み取ったり対しても親しみをもつようになる姿も見られる	5・6年の目標と内容「鑑賞」
		楽しかったこと、驚いたことなどの出来事、好きなものや考えたお話などを思いのままにかいたり	1・2年の目標と内容「A表現(1)」
	高学年	好きなものをや考えたお話を思いのままにかいたりつくったりしている姿が見られる	1・2年の目標と内容「A表現(1)」
対象への関わり	低学年	自分自身を委身させたり何かになりきったりして、空想することを楽しんでいる姿も見られる	1・2年の目標と内容「A表現(1)」
		表現及び鑑賞の活動においても、表し方を工夫することに意欲を示したり	3・4年の目標と内容「目標」
	中学年	見ることに関心をもちながら表すことができるようになる中学年の児童の発達	3・4年の目標と内容「A表現(1)」
	高学年	新しく目にする材料や身の回りの材料、様々な表現方法に興味をもち、自分の表現に生かしていこうとする姿も見られる	3・4年の目標と内容「A表現(2)」
		社会的な話題を作品の主題にしたり、流行の形や色を反映させて発想したりする	5・6年の目標と内容「A表現(1)」
	高学年	社会的な視野の広がりからわが国及び諸外国の美術作品などにも親しみをもつて捉えるようになる姿も見られる	5・6年の目標と内容「鑑賞」
思考過程	低学年	児童の意識や活動範囲が自分から他者、社会に広がるという発達の特性に応じて	A表現絵や立体工作(2章・全体)
		周りの人、物、環境などに体ごとに関わり全身で感じるなど、対象と一体となって活動する傾向がみられる	1・2年の目標と内容「目標」
	中学年	土や粘土などの材料に体ごとにかかわって楽しんだり、身近にあるいろいろな材料を並べたり、つまみたりして、進んで材料などに働きかけている姿がみられる	1・2年の目標と内容「A表現(2)」
	高学年	ある程度対象や事象を客観的に捉えられるようになる	3・4年の目標と内容「A表現(1)」
		対象と事象と自分の印象とを分けて捉えている姿が見られる	3・4年の目標と内容「鑑賞」
	高学年	中学年においても自分と対象が一体化するような気持ちで作品を見る傾向	3・4年の目標と内容「鑑賞」
思考過程	低学年	自分の作品や発言を第三者的に振り返ったり、集団や社会などとの関係で捉えたりするようになる	5・6年の目標と内容「目標」
		周りの人や周囲の環境などに関わりながら考え、他者の立場に立ち、活動や作品などを見たり考えたりする姿が見られる	5・6年の目標と内容「A表現(1)」
	高学年	一人一人の見方や感じ方などが育つてくると同時に物事を他者や社会的な視点から捉えるようになる姿が見られる	5・6年の目標と内容「鑑賞」
	高学年	活動を進めながら表したいことを見つけていることが多い	1・2年目標と内容「A表現(1)」
		具体的な活動を通して思考したり、既成の概念にとらわれずに発想したりするなど特徴がみられる	1・2年目標と内容「目標」
	高学年	結果にこだわらずに様々な方法を試したり、発想が徐々に展開したりするなどの様子も見られる	1・2年目標と内容「目標」
思考過程	低学年	進んで材料などに働きかけそこで見つけたことや感じたことを基に思いを膨らませたり	1・2年の目標と内容「A表現(1)」
		形や色を選ぶときにも直観的で	1・2年の目標と内容「共通事項」
	中学年	広い場所や狭い空間などを利用しながら思いついたり	3・4年の目標と内容「A表現(1)」
	高学年	夢や願いを表現したり、想像したりすることを楽しみながら表現が徐々に展開していくなどの姿も見られる	3・4年の目標と内容「A表現(1)」
		想像したことを実現することに熱中したりする	3・4年の目標と内容「目標」
	高学年	手を働かせながら技術的な判断を繰り返したりしている	3・4年の目標と内容「共通事項」
思考過程	低学年	絵の具のにじみなどのよさに気付いてそれを自分の表現に生かしたりする	3・4年の目標と内容「鑑賞」
		考えと理由、事実と気持ちなどを関係づけるようになる	3・4年の目標と内容「共通事項」
	高学年	イメージを友人と調整しながら共有したり、新しい自分のイメージをつくりだしたりするなど、イメージを操作しながら表現や鑑賞の活動を展開するようになる	5・6年の目標と内容「共通事項」
	高学年	概観から立体の構造や空間を把握したり、心に描いた情景や像などから形や色を考えたりするなど、中学年よりも具体的な特徴に即してイメージをもつ	5・6年の目標と内容「共通事項」
		話し合いで共通のテーマにして考えたりするなど、いろいろな方法でこれに応用する姿も見られる	5・6年の目標と内容「共通事項」
	高学年	自分が表したいことやもののイメージと、実際に表したいこととの違いを感じ、表現することに苦手意識をもつこともある	5・6年の目標と内容「A表現(2)」
高学年	自分の表したい主題が明確になるように、納得するまで表現方法を試したり	5・6年の目標と内容「A表現(2)」	
高学年	表したいことに適した材料や用具を選んだり、表現方法を組み合わせて表したりする	5・6年の目標と内容「A表現(2)」	
高学年	他教科等で学習した内容などを活用している姿も見られる	5・6年の目標と内容「A表現(1)」	
高学年	様々な視点から自分の行動や考えを検討したり、友人の立場に立ってその心情に思いを巡らせたりするようになる	5・6年の目標と内容「目標」	
高学年	友人の作品を見るときに、自分が試みた形や色、表し方の工夫などを視点に鑑賞する傾向がある	5・6年の目標と内容「鑑賞」	

とを躊躇したりすることもある」といった、他者を意識するがゆえの発言への躊躇がある一方、「出来事から特徴を取り出し」、「それを言葉に置き換えて説明」できるといった記述があり、分析的・論理的に発言・対話・発表ができることが特徴として挙げられていた。

【材料用具との関わり】：児童が材料用具を扱う際の特徴を示す観点

低学年では、「材料の感触を楽しんだり」や「体ごと関わって楽しんだり」、また、「進んで材料などに働きかけている姿」といったように、全身を使った材料用具への直接的関与や、材料への働きかけに対する純粋な興味や行動に関する記述がみられた。中学年では、「材料や用具の広がりにより、多様な試みも行われる」や「表したいことに合わせて材料や用具をつかう」、「活動場所も広がる」といったように、発達に伴う材料用具の使用範囲の広がりや、用途やイメージに基づく用具の選択、そして、用具の試行的活用が可能になるといった記述が見られた。さらに、高学年では「多様な材料や用具の経験があり、扱い方も巧みになる」や「表したいことに適した材料や用具を選ぶ」といったように、経験が蓄積されたことによる用具使用の技巧の発達や表現に適合した材料用具の選択が可能になることが記されていた。

【経験・体験との関わり】：児童自身の経験や体験の捉え方に関する特徴を示す観点

低学年では、「生活体験が直接学習活動に関連する」や「活動と場、体験と感情が密接に結びついている」、「見たり聞いたりしたことと驚きや喜びを一体的に捉えている」といったように、直接的体験を基本とした活動・体験・感情の一体化に関する傾向が示されていた。中学年では、「生活範囲の広がりに応じて鑑賞の対象も広がる」や「これまでの経験を生かし、人やもの等の様々な条件を組み合わせたり、それらを調整したり」や「事実と結果などを関係づけられるようになる」といったように、生活範囲の拡大と共に認識できる内容の範囲が低学年に比べて広がること、そして、出来事とイメージとをある程度分離させ、物事の因果関係を考えられることが記されていた。そして高学年では、「社会的な情報を活用して考えたり、直接体験していないことに思いを巡らせたりすることができる」や「他教科等で学習した内容や考え方などを活用することができるようになる」、「自分の経験を基に形や色などの特徴から分析的に見る」といった記述があるように、直接的体験と間接的体験による経験の捉えの違いを認識できたり、活用の対象として社会的な情報を取り入れたり、形や色を通した体験の分析的振り返りができるようになることが記されていた。

【技能】：児童の技能に関する特徴を示す観点

低学年では、「結果にこだわらず様々な方法を試す」や「発想や構想をすることと技能を働かせることが密接につながっている」のように、技能が独立しておらず思考と技能とが一体化しているという特徴が記されていた。中学年では、「材料や用具の扱いが巧みになる」といった身体的発達に伴う技能の向上のみならず、「分析的に見て意図や気持ちを見取ったり作品を深くとらえられるようになる」や「ある程度予測しながら活動できる」といったように、考えたり予測したりできる技能の記述もあった。さらに高学年では、「用具や表し方を工夫する力」、「一度作ったものを改めて新たなものをつくり出そうとする力」、「どのような形にするかを考える力」といったように、技能の捉えが身体的機能や材料用具を扱う動作的技能から思考の技能を中心とした記述に変化していた。

【興味関心・意欲】：児童が有する興味関心や意欲に関する特徴を示す観点

低学年では、「かいたりつくったりする活動そのものを楽しむ傾向」や「変身させたり何かになりきったりして、空想することを楽しんで」のように、創造的な造形活動を楽しむ傾向が述べられている。

た。中学年では、「表し方を工夫することに意欲を示し」や「気に入った活動を意欲的に追究したりする」のように、想像したことを実現させることに熱意を持ったり、表現方法を自分なりに考えることに意欲を持つことが述べられていた。そして、高学年では、「社会的な話題を作品の主題にしたり」や「児童の意識や活動範囲が自分から他者、社会に広がるという発達の特性」、「納得いく表現や鑑賞の活動ができたり作品を完成させたときなどに充実感を感じる」といったように、興味関心の範囲が自分の生活している周囲のみならず広く社会で起こる事象に至ること、そして、表現では再現的表現への関心や納得の有無が意欲に関わることが記されていた。

【対象への関わり】：児童が対象物や対象者と関わる際の特徴を示す観点

低学年では、「周りの人、物、環境などに身体ごとに関わり全身で感じる」や「身近にあるいろいろな材料を並べたり、つんだりして、進んで材料などに働きかけている」とあるように、対象と自分自身とを一体化して捉える傾向や、積極的に対象に働きかける特徴が記されていた。中学年では、「対象と事象と自分の印象とを分けて捉えている姿が見られる」とあり、客観的に物事を捉えられる傾向がある一方、「中学年においても自分と対象が一体化するような気持ちで作品を見る傾向」が残っているとされた。そして、高学年では、「周りの人や周囲の環境などと関わりながら考え」や「物事を他者や社会的な視点からとらえるようになる」との記述のように、対象を他者や社会的視点から捉えたり、分析的に捉えたりできること、そして、自分の作品や発言を第三者的に振り返ったり、集団や社会などとの関係の中で捉えたりできることが特徴として挙げられていた。このことについてガードナーは、この時期の特徴を「空間関係の正確な表現への関心」¹¹⁾とし、ローウェンフェルドもこの時期に行われる観察とは単に見たり知ったりする能力ではなく、「空間において表れる変化についての視覚的映像を分析する能力である」としている。

【思考過程】：児童の思考過程の特徴を示す観点

低学年では、「形や色を選ぶときにも直観的」であり、「具体的な活動を通して思考したり、既成の概念にとらわれずに発想したりする」、さらに「つくりながら考え」、「発想が次々に展開したりする」とされた。このように、活動と思考が連動しながらなおかつ直観的な即興性や柔軟性を持って表現や鑑賞が進められる特性が述べられていた。中学年では、「対象や事象、身近な出来事に対して自分の考えやイメージを具体的にもつようになる姿」がみられ、製作過程では、「考えと理由、事実と気持ちなどを関係づけ」たり、「絵の具のにじみ」や「友人の作品や身近な材料などから、自分の見方や感じ方を広げたり」すること、さらに、「形や色などについては、単に区別するだけでなく、三角形は鋭い感じがする、赤い色は元気な感じがするなど、対象の感じまでとらえることができるようになる」と記されていた。このように、中学年ではある程度の客観的視点を伴う発想・構想に基づく製作が可能であり、製作過程で発見したことから思考を広げたり関係づけたりできることが記されていた。そして、高学年では、思考過程の特徴として「造形的な特徴を関連付けたりまとめたりできるようになる」、「結果を予想したり、条件を基に可能性を検討したりするなど、論理的な進め方が可能になる」、「社会的な情報を活用して考えたり、直接体験していないことに思いを巡らせたりすることができる」、「他教科等で学習した内容などを活用している姿も見られる」ことが示され、「納得するまで表現方法を試す」特徴が述べられていた。また、高学年では、友人からの影響に関する記述もあり、「イメージを友人と調整しながら共有したり」や「話し合いで共通のテーマを考えたり」できることが示されていた。その一方で、「自分が表したいことやもののイメージと、実際に表したいこととの違いを感じ、表現する

ことに苦手意識をもつこともある」との記述もあり、技能とイメージとのギャップに苦しむ姿も記されていた。平成20年版、平成29年版に共通して、思考過程の在り方に関する記述は他の観点に比べて相対的に分量が多く、図画工作科において表現・鑑賞双方に活動の過程の在り方が重視されていることがうかがえた。

3.3 平成20年版と平成29年版の比較

本節では、前節で示した観点及び『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』¹²⁾(以後、答申と記す)、そして新学習指導要領の「改訂の経緯及び基本方針」等の内容を踏まえ、主に平成29年版における児童観の記述の変化を記す。なお、以下に示す下線はすべて筆者による。

まず、量的な変化として、平成29年版では、第3章「各学年の目標及び内容」における各学年の〔共通事項〕の項と、第4章「指導計画の作成と内容の取扱い」で、児童観の記述量が増加していた。特に第4章では、章全体に占める児童観の記述の割合が、平成20年版では2%であったのが、平成29年版では9%に増加していた¹⁾。増加した記述内容の特徴は3点あり、1点目は、「形」、「色」、「イメージ」の文言が含まれた記述内容の増加、2点目は日常生活と図画工作科の関わりに関する記述内容の増加、3点目は、複数の資質・能力を関係づける記述内容の増加である。

1点目の「形」、「色」、「イメージ」の文言が含まれた記述について、【対象への関わり】の中学年では、平成20年版の「対象や出来事に対して自分の気持ちや考えを具体的に持つようになる」の一文が、平成29年版では「対象や事象、身近な出来事に対して自分の考えやイメージを具体的に持つようになる」に変更され、文中に「イメージ」が新たに追加されていた。また、同じく中学年では「形や色などについては、単に区別するだけでなく、(中略)対象や事象から受ける感じに気付くような姿が見られる」の一文も新たに追加された。さらに、【思考過程】では、「偶然に見つけた形や色などから自分のイメージをもっている姿も見られる」(低学年)や「形や色の造形的な特徴から、目には見えない心や音などをイメージする」(高学年)、「造形的な特徴を捉え、抽象的なイメージをもつこともできるようになる」(高学年)といった、平成20年版には無かった記述が新たに追加された。このように、「形」、「色」、「イメージ」の文言が含まれる記述内容が増加した背景には、答申で示された図画工作科における「見方・考え方」の内容が影響していると考えられる。答申では、図画工作における見方・考え方を「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージを持ちながら意味や価値をつくり出すこと」とし、図画工作科の目標文にも「造形的な見方・考え方を働かせ」ることが明記された。このことを受け、「形」や「色」といった造形要素の捉えや児童期の「イメージ」に関する特徴が児童観に追加されたと考える。

2点目の日常生活と図画工作科の関わりに関する記述では、【経験・体験との関わり】の低学年で「この時期の児童には、身近にあるものを、(中略)自分なりの感覚や気持ちを基に捉える傾向がある」が新たに追加され、中学年や高学年でも、図画工作科の授業での学習活動だけではなく、「学校や家庭などの他の場面でも」色や形に着目して関わるようになる、との一文が追加された。児童の生活と図画工作科の関わりに関しては、【対象との関わり】の高学年で、平成20年版から、「社会的に広く流通している図像や情報」を学習材にできることや「物事を他者や社会的な視点から」捉えられること、また、「社会的な視野の広がりから我が国及び諸外国の美術作品などに対しても親しみをもって」捉えられる

ことといった記述があった。その上で、平成29年版ではより日常生活に近い場面で、図画工作科で育成された資質・能力が働くことが児童観として示された。このことは、答申で「生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心を持って、生涯にわたり主体的に関わっていく態度」の育成が目指されたことが影響しているものと考えられる。また、改訂の趣旨でも、「生活を美しく豊かにする造形や美術の働き」について理解を深めることや「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力の育成を一層重視する」ことが記された。加えて、答申において技能が「主体的に活用できる技能として習熟・熟達していく」こととされたように、身に付けた技能を活用する場面として日常生活が位置づけられているとも考えられる。

3点目の、複数の資質・能力を関係づける記述では、【経験・体験との関わり】において「低学年では特に発想や構想をすることと技能を働かせることが密接につながっている」（低学年）や「形や色などを捉えることと、自分のイメージをもつことも、一体的に捉えている傾向がある」（高学年）といった記述が新たに加えられた。このことは、新学習指導要領で図画工作科の内容「A表現」が（1）発想や構想に関する事柄、（2）技能に関する事柄となり、「思考力、判断力、表現力等」と「技能」の観点から整理して示されたこととも関連する。また、「独立して設定した鑑賞の場面で、新たな発想や構想、技能の手掛かりをえることもある」（中学年）との記述が加えられたように、独立した鑑賞の場合でも表現と同じ資質・能力の育成が期待できることも児童観の記述に含まれた。このことについて、答申では、資質・能力の「三つの柱は相互に関連し合い、一体となって働くこと」とされ、「必ずしも、別々に分けて育成したり、「知識・技能」を習得してから「思考力・判断力・表現力等」を身に付けるといった順序性を持って育成したりするものではない」とされた。このことを踏まえ、表現、鑑賞の学習内容のそれぞれに共通して働く力や、育成を目指す資質・能力の3つの柱の相互の関連性を児童観の中で示すことで、これらが個別に育成されるものではなく、相互関係を持つ一体的な育成が目指されることが児童観の中で示されたものと考えられる。

以上の通り、平成29年版の児童観では、答申の内容や新学習指導要領の「改訂の経緯及び基本方針」等の内容が記述内容に反映されている箇所が散見された。

4 本研究の成果と今後の課題

これまでの実践や研究において解説が引用される場合、教科の目的や内容に関する記述の引用が中心であり、学習指導要領の目的や内容の基盤として位置づけられた児童観に焦点が当てられることはほとんど無かった。この状況を踏まえた本研究の成果は次の3点である。1点目は、児童観を8種類の観点で示したこと、2点目は各観点における低学年、中学年、高学年の内容の相違を整理したこと、3点目は、答申の内容や改訂の趣旨を参照しながら平成20年版と29年版の比較をし、児童観がどのように変化したのか、その特徴を示したことである。

今後の課題は、解説に記述された児童観の検証である。『小学校学習指導要領解説 図画工作編』では、背景となる研究成果が引用等の形で示されることは無い。よって、何を根拠として児童観が示されているのかが明確ではない。また、児童観は答申や新学習指導要領の内容に基づいて変化しており、誘導的に児童観が記述される傾向も見られた。そこで、本研究で整理した児童観に基づき、児童は記述されているような特性を有するのか、また、他に見取るべき観点は無いのかを検証する必要がある。

注

- i) 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』第4章の児童観の記述率について、平成20年版では239行のうち6行、平成29年版では600行のうち52行が児童観の記載に充てられていた。

参考文献

- 1) 青木一・小川利夫・斎藤浩志・山住正己・大槻健編、『現代教育学事典』，労働旬報社，1998
- 2) 日本家政学会編、『児童学事典』，丸善出版，2018
- 3) ブリタニカジャパン編、『ブリタニカ国際大百科事典』，1984
- 4) V. ローウェンフェルド著，竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄訳、『美術による人間形成（第3版）』，黎明書房，2002
- 5) 東山明・東山直美，『子どもの絵は何を語るか 発達科学の視点から』，NHK出版，1999
- 6) 阿部宏行，「子どもの絵における空間表現の発達と指導（1）－「食事の風景」の絵を通して」，『美術教育学』，35巻，pp.15-26，2014
- 7) 文部科学省，『小学校学習指導要領解説 図画工作編』，日本文教出版，2008
- 8) 文部科学省，『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』，日本文教出版，2017
- 9) 林創，「見て・さわって・かんじる」，坂上裕子・山口智子・林創・中間玲子著『問いから始める発達心理学』，pp.124-139，有斐閣，2014
- 10) J.ピアジェ著，大伴茂訳，『臨床児童心理学』，同文書院，1955
- 11) H.ガードナー著，星三和子訳『子どもの描画 なぐり描きから芸術まで』，誠信書房，1996
- 12) 文部科学省，『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』，2016

The View of Children in the “Revisions of the Course of Study for Elementary Schools: Arts and Crafts Edition”: Analysis of Versions Heisei 20 and Heisei 29

Kaori ARAI¹, Satoshi IKEDA², Doumu AIDA³, Taiju KUROSAKA⁴,
Usyou KATOU⁵, Maiko NAWATA⁶, Haruna BUTSUSAKI⁷

1 Doctoral Program, Graduate School of Education, Hiroshima University

2 Hiroshima University

3 Master’s Program, Graduate School of Education, Hiroshima University

4 Master’s Program, Graduate School of Education, Hiroshima University

5 Director of ‘Atelier PAO’

6 Isa Elementary School, Mine, Yamaguchi

7 Oko Elementary School, Etajima, Hiroshima

Abstract

This study aims to clarify the view of children described in the “Revisions of the Course of Study for Elementary Schools: Arts and Crafts Edition,” covered in Heisei 20 and Heisei 29 versions. In this study, the authors used an affinity diagram to categorize the views of children, considering aspects of friendship, language activity, materials and tools, relationship to their own experience, skills, curiosity and motivation, relationship to the target, and thinking process. In our discussion, we compare the views of children in lower grades, middle school years, and the senior year and show differences in their content according to developmental stage.

Keywords : View of Children, View of Pupils, Arts and Crafts,
Revisions of the Courses of Study for Elementary Schools, Arts and Crafts Edition